

理学部は今

No.20 September 2008

理学部のホームページ <http://www.sc.niigata-u.ac.jp>



柏崎高校SSH1連携講座（9月3日）、生物分野実習



旭町展示館の展示資料を用いた学生実習



C棟西側改修工事始まる。平成21年3月完成予定



スタンプラリー参加者（関連記事8ページ）

CONTENTS

■研究紹介

化学科 教授 工藤久昭……………2

物理学科 教授 宮田 等……………2

化学科 准教授 田山英治……………3

■平成20年度理学部後援会事業計画 ……3

■平成19年度理学部後援会事業報告 ……3

■学科等ニュース

数学科……………4

物理学科……………4

化学科……………4

生物学科……………5

地質科学科……………5

自然環境科学科……………5

附属臨海実験所……………6

■退任教員の紹介

自然環境科学科 教授 西村浩一…6

■事務職員紹介……………6

■2008年オープンキャンパス実施…………7

■2008年学部・学科体験報告……………7

■理学部コロキウム……………8

■頭足類展 アンモナイトとその仲間たち…8

■平成19年度卒業生進路状況および

平成20年度入学者数 ……8

■これからの行事予定……………8

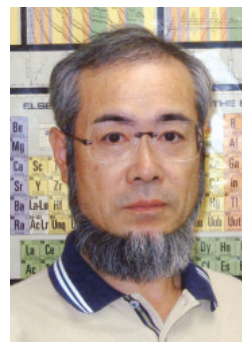
周期表の拡張をめざして

元素を原子番号順に並べていくと、化学的性質に周期性が現れることはよく知られており、それは元素の周期表としておなじみのものであります。全ての元素は周期表の1席を占めていますが、ではこの表はどこまで拡張していくのでしょうか？ 新しい元素が発見されたとしたら、その配置されている場所から化学的性質が予想できるのでしょうか？ 元素の原子番号は原子の中心にある原子核の中の陽子の数でありますから、見方を変えたと原子核が原子核として存在できる限界があるのでしょうか？ このような疑問は、科学者ならずとも興味の惹かれるところであると思います。

今から40年近く前、初めて放射化学についての講義を聴いたのが新潟大学理学部化学科1年生のときでした。担当の外林先生が使用しておられた英語の教科書を東京に出た折に購入し、わくわくしながら開いたのを今でも覚えています。それ以来放射化学の分野に身を置いています。博士課程では重い原子核の核分裂機構をテーマにしていました。もっぱら原子核を壊す方向、すなわち重い元素から小さい元素を作る方向です。逆の方向、軽い元素から重い元素を作るほうに興味に移っていったのは、現代の錬金術師といわれたシーボーグ教授（米国ローレンス・バークレー研究所）の下での博士研究員のころからだと思います。

原子番号が100より大きな元素はすべて重イオン核反応によって作られます。原子と原子を衝突させてより大きな原子を作ろうとするわけですが、原子核は正の電荷を持っていますので、衝突のエネルギーが小さいと反発のため核反応が起こりません。

化学科 教授 工藤 久昭



そこで、一方の原子をイオンにして加速して反応させます。加速のエネルギーが大きすぎると、二つの原子核はまた離れてしまい、大きな原子核になりません。どのような原子核の組み合わせで、どのような加速エネルギーのとき大きな原子核ができる確率が高いかをすでにわかっている原子核について調べ、それらをもとに、より大きな原子核の合成、すなわち新元素の発見を目指すことになります。理化学研究所での共同研究により発見した113番元素は、83番元素のビスマスにおよそ光の速度の10分の1に加速した30番元素の亜鉛を衝突させて作りました。

一方、短い寿命でしか存在できない新元素の化学的性質はどのようなものであるか、周期表での位置は妥当なものであるか、ということも非常に興味のあるところです。104番元素より重い元素では生成確率が小さいことと短い寿命のために一度に使うことができる原子の数は限られています。ほとんどの場合、原子1個です。原子1個で化学をすることになります。このような状況のもと、104番元素のラザホージウムや105番元素のドブニウムについては、化学的性質がかなり明らかになり、周期表での位置が確立されつつあるといっても良いでしょう。

このように、役には立ちそうにもない夢を追いかけていますが、今後ともよろしくお願い致します。

私の教育研究活動

物理学科 教授 宮田 等

私は新潟大学に着任以来、高エネルギー物理学研究室に所属して各種の研究テーマに取り組むと共に、大学院生の教育や国際交流などにも重点をおいて活動してきました。物質を作る最小基本粒子（素粒子）とは何か？ 力とは何か？ この宇宙はどうやってできたのか？ 物質にはなぜ質量があるのか？ などの最も基本的な疑問に答えようとするのが高エネルギー物理学実験の分野です。

この研究分野において、私の研究室では1) 原子炉から発生している不思議な粒子ニュートリノの質量の研究、2) 我々の世界を作る物質とは反対の物質（例えば、プラスの電荷をもつ電子）が

どのように異なっているかを調べる研究、3) 企業との共同研究で有機半導体を用いた放射線検出器の開発などを行ってきました。

これらの研究テーマを行うことで、博士課程、修士課程、卒業研究生の教育研究指導を行ってきました。また、1997年にフィリピンのミンダナオ大学と新潟大学の両理学部間で学術交流協定を結び、約10名の研究者や学生を研究室に受け入れてきました。新潟大学からも研究室の大学院生等と共にフィリピンの物理学会やミンダナオ大学での学術会議にこれまで6回参加しました。これからも、研究、学生教育、社会貢献、国際交流などを密接に関連づけながら活動していきたいと思っています。



原子炉で発生する不思議な粒子ニュートリノの質量の研究 (Double Chooz実験 フランス)



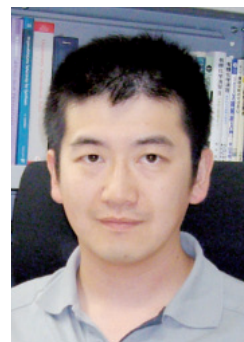
フィリピン中南部物理学会(SPVM)の実行委員等と共に

四級窒素原子の化学

平成20年8月1日付で准教授に昇任いたしました。

例えば5年前、自然科学研究科に助手として着任し、研究室主宰者であった中井武教授（現・早稲田大学客員教授）の下で大学での研究・教育活動を行ってきました。私の新潟大学での研究

化学科 准教授 田山 英治

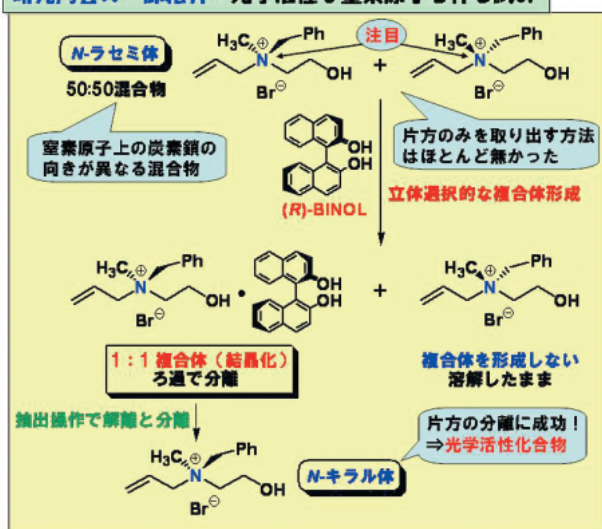


成果が論文として掲載され始め、さあこれからという頃に中井先生が定年退職（平成18年3月末）となり、その後は実質一人で研究室の運営を行い、研究室に残った修士大学院生と新しく配属される学部4年生と共に研究活動に励んできました。

中井先生退職後は、プレッシャーの中での約2年半でありました。研究費を獲得できるか？ 研究業績を積み上げることができるか？ 将来ステップアップできるか？ 幸いにも科研費と民間財団からの研究費獲得に恵まれ、中井先生退職後の2年半の間も、研究室の活性度を保ちつつ研究活動を継続することができ、研究室の規模を考えると上出来と言えるほどの研究業績を発表することができました。共に研究に励んでくれた学生諸君には、私が要求する実験の質と量に応え、日々研究活動に励んでくれたことに深く感謝を申し上げます。

現在、助教の身分で研究室の運営を経験するケースは希であると思います。私が経験した2年半は、まさしく「Assistant Professor」であり、このような貴重な機会に恵まれたことに感謝すると共に、この状況を許容していただいた化学科各教員の方々に深く御礼いたします。

研究内容の一部紹介：光学活性な窒素原子を作る試み



平成20年度 理学部後援会事業計画

1 定期総会の開催

平成20年4月7日（月）11時から
新潟大学理学部B303講義室

2 各種事業

(1) 学生の課外活動及び福利厚生関係

- ① 新聞の購読（新潟日報、朝日新聞、日本経済新聞、日刊スポーツ）
- ② 大学祭援助
- ③ 学生用設備充実の援助

(2) 学部教育事業関係

- ① 特別講演会開催への援助
- ② 学生研修、実験・実習への援助
- ③ 国際交流事業関係等への援助
- ④ インターンシップ関係等への援助

(3) 卒業祝賀会関係

卒業式当日に卒業祝賀会を開催
（参加者：卒業生、保護者、同窓会役員、後援会役員、教職員）

(4) その他

広報活動として「理学部は今」を年2回発行

3 理事会の開催

平成21年3月27日（金）17時30分から理学部小会議室

平成19年度 理学部後援会事業報告

1 定期総会の開催

平成19年4月5日（木）11時から
新潟大学理学部B303講義室

2 各種事業

(1) 学生の課外活動及び福利厚生関係

- ① 新聞の購読（新潟日報、朝日新聞、日本経済新聞、日刊スポーツ）
- ② 大学祭援助
- ③ 学生用設備充実の援助（掲示板及び照明機器取付）

(2) 学部教育事業関係

- ① 特別講演会の開催、学生用図書購入、新入生合宿研修、野外実習及び臨海実習等の援助
- ② 学生インターンシップ協力事業所との懇談会への援助
- ③ 国際交流事業関係等への援助

(3) 卒業祝賀会関係

平成20年3月24日（月）15時30分から（卒業式終了後）
新潟東映ホテルで卒業祝賀会を開催し、卒業生、保護者、同窓会後援会役員、教職員の方々から多数参加いただき盛大に行われました。

(4) その他

広報活動として「理学部は今」を年2回発行

3 理事会の開催

平成20年3月28日（金）17時30分から理学部小会議室

数学科

本年度は、学部新入生38人、3年次編入生2人、博士前期課程新入生11人、後期課程進学者3人を迎えてスタートしました。学部新入生に対しては、例年開催している新入生合宿研修が、予定していた施設のアスベスト除去の改修工事のため中止となってしまう残念でした。

5月に入り恒例となっている卒業生を招いての講演会を開催しました。毎年度2回開催していますが、この時期は教員になることを希望する学生向けに教員になった卒業生に講演をお願いしています。今回は、小口洋平さんと番場詩保さんが講演をしてくださり、約30人の学生が熱心に聞いていました。

3年生の幹事佐藤さんが中心となり、新入生を歓迎する縦コンが開催されました。約50人が参加しました。自己紹介のときに、特技を見せる学生がいました。すごいと思ったり、軟体動物かと思ったり、楽しい一時でした。5月の下旬から6月中旬まで、教育実習で4年生の半数以上が留守になるので、研究室近辺は静かでした。

理学部では、順番に各学科での研究紹介を校舎の玄関ホールに掲示しています。6月中旬から数学科の番になりました。今回は、田中、秋山、山田、印南の各教員がポスターを掲示しました。本人を知る人を見ると、研究スタイル、特徴、性格がよく現れた出来栄になっていました。当然のことながら、内容は数学なので、しっかり考えながら読まないで理解できないのが難点です。

6月の理学部コロキウムでは、「結び目の数学 ～同じ結び目?～」というタイトルで、数学科の高田教員が講演しました。面積や体積のときは、数値化して同じかどうかを判断しますが、結び目の場合は、ジョーンズ多項式と呼ばれるものを計算し、それが同じかどうか判断材料になります。統計力学との関連やDNAの研究との関連などの結び目理論の応用についても解説したので、講演後に、物理や生物を研究されている学生や教員からの質問もありました。

7月中旬から下旬にかけて試験期間となり、第Ⅰ期が終了しました。

物理学科

物理教室では新潟南高等学校との間で高大連携講座を開催しており、昨年に引き続き2回目となります。日頃は世界の学者を相手に物理学の研究を進めている物理教室の教員10名が、感受性と興味にあふれる高校生を相手に講義を進めています。5月24日(土)に開校式をおこない、高大連携講座校長である松尾教授の「物理学とは何だろうか」を皮切りにして、月に一度のペースで主に土曜日午後に通算15コマにもおよぶ講義／実験が組まれました。キーワードには、数式と概念、放射線と医療、クオークとはなにか、宇宙とは何か、超伝導の仕組み、-200℃の低温の世界、原子のレントゲン写真、素粒子入門、高エネルギー物理などを揃え、受講生の知的好奇心を満足できるようがんばっております。この連携講座を期により多くの高校生が物理学分野への進路に興味を持ってもらえることを期待しております。



学科の行事としては恒例のKelvin祭が6月6日に開かれ、研究室紹介から始まり学生対話集会、そしてバーベキューパーティーが行われました。今年は181名の参加者となり、学年の壁を越えた学部生、大学院生と教員職員との交流の場となっております。また、高校生向けの公開イベントとして今年も8月4日と8日に学部・学科体験とオープンキャンパスがそれぞれ開催されました。体験授業「暗黒宇宙を輝らす光～20世紀の物理学革命と21世紀の展望」では「光」をキーワードに現代物理学の幕開けと未来について講義が行われ、立ち見が出るほどの盛況でした。展示実験「放射線を見てみよう」では放射線検出器を使ってがん診断法の一つであるPETの原理についての実験を行いました。学科の紹介の部屋では大学院生らが高校生の皆さんと研究紹介のポスターや大学の授業の教科書を見ながら大学生活についてお茶菓子をつまみながら歓談しました。

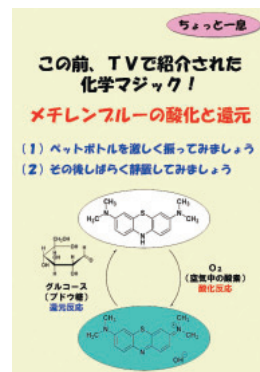
化学科

6月末、新しい化学科ホームページ (<http://chem.sc.niigata-u.ac.jp>) が公開されました。昨年度末から化学科教員の協力の下、全面リニューアル作業に取り組み、実質作業役である生駒先生の御尽力もあり、ようやく公開にこぎ着けました。旧バージョンと比較するとかなり明るい作りとなっております。特に「新着情報」の項目が追加され、ここから講演会の案内、学科関連行事(学生主催も含む)の様子、教員・学生の表彰、といった最近の化学科の状況を知ることができます。項目によっては写真付きで掲載されておりますので、化学科での学生生活の雰囲気がつかめるかと思います。

夏の恒例行事、「学部学科体験」が8月4日、「オープンキャンパス」が8月8日に行われました。化学科では研究室案内&模擬



実験、及びポスター展示を行い、高校生に大学で行われている化学について説明を行いました。その中で高校生のみならず、他学科の大学院生も興味を集めた展示の一つが、先日あるテレビ番組で紹介された「メチレンブルーの酸化と還元」(図を参照)でした。「ペットボトル内の透明な液体、振り混ぜると青色に変化し、その後静置すると透明に戻る」という化学マジックの内容です。



生物学科

生物学科は今年度21名の新生と3名の3年次編入生を迎え、4月18日(金)18:15から生協喫茶室にて、恒例の新生との懇親会を行いました。この企画は、新生と学科教員一特にそれぞれのアドバイザー教員が入学後早い時期にお互いを知る目的で始められたもので、今年で4回目になります。今年の自己紹介のお題は「私の出身地自慢」で、ノンアルコールにも関わらず盛り上がった楽しい2時間でした。

懸案だった理学部C棟西側の改修工事が8月上旬から始まりました。学部学科体験とオープンキャンパスの展示企画は、西側との間の廊下が仕切られたC棟東側にある学生実習室で行われまし

た。来春の完成後には植物系4研究室が5年半の仮住まいで住み慣れた生命環境棟7階から移転する予定です。



地質科学科

地質科学科は今年度も25名の新入学生を迎え入れ、新たなメンバーで年度の前半をつつがなく終えたところです。平成20年度の学科長は松岡篤教員が務めています。

当学科は3年次以降、全員が「地質エンジニアリングコース」と「地質学専修コース」のいずれかに所属して学部の後半の学習を行います。前者の教育内容は昨年度にJABEE(日本技術者教育認定機構)の中間審査を受け、厳しい審査基準をクリアし、認定の継続が認められました。これにより平成22年度までの地質エンジニアリングコース修了生は、「技術士補」の国家資格を試験免除で得られます。

例年3月末に実施されます新3年生の「野外実習Ⅱ」(通称「大巡検」)は、新潟県外でさまざまな地質を見学し、地球の理解に関して視野を大きく広げる機会になります。今年の大巡検では、九州北部で、三池炭田、有明海、阿蘇火山、延岡衝上断層、三波川変成岩など、県内では見られない地質を選びすぐて見学しました(写真)。また、理学部の校舎の改修は着々と進んでおり、「岩石学実験」(2年次)の実施される実習室では部屋だけでなく机や椅子もすべて新調され、より快適な学習環境になりました。

昨年秋に正式オープンした「サイエンスミュージアム」は当学科が保有する貴重な岩石・鉱物・化石資料などを中心に展示しており、学内外から多くの見学者を集めています。今年度は大学の旭町資料展示館との連携イベントも開催するなど、さまざま

な取り組みを行っています。皆様もご来学の折にはぜひお立ち寄りください。毎週火・水・木曜の午前10時から午後3時の間、無料にて開放しております。また、今年から「地質の日」が記念日として制定されたのに伴い、当学科と地質関係の他学科・他学部・NPO法人「ジオプロジェクト新潟」などが連携して当日の5月10日に関連イベントとして「サイエンスフェスティバル」を開催しました。地元新潟市西区の小学生ほかの来訪者が450名ほど参加されて、盛況でした。

研究面では、今年度、「地球環境・地球物質研究センター」が、新たに発足しました。これは新潟大学内の地球科学関係者が所属を横断して結集する学内研究グループで、研究の一層の活性化が期待されます。このセンターの事業代表者は、当学科の宮下純夫教員が務めています。



自然環境科学科

昨年度の9月に浮田甚郎教授と上井進也准教授の2名が新しく赴任されました。浮田教授は、海氷力学や熱力学が専門で、地球規模の気候変動のメカニズムの解明に取り組んでいます。上井准教授は、植物系統分類学、特に藻類学が専門で、褐藻類における種分化や系統進化の研究に取り組んでいます。ご両人ともこれまで新潟大学にはなかった分野の研究者であり、地球環境や自然環境を理解することを目的とした当学科の教育体制をさらに充実したものにしてくれると期待されています。

4月には、新1年生31名と3年次編入生2名が入学しました。5月10日(土)には、北区島見町の実験場の森キャンプ場で1年生と教員との新生研修を行いました。まだ肌寒い季節でしたが、学生がつくる料理が昼食になりました。また、本年度はそれとは別に、学生主催による新1年生のための学科遠足が5月17日(土)に開催されました。3年生が中心となり、五泉市のイトバラトミ

ヨの棲む湧水池や福島潟見学、および菅名岳登山を行いながら、自然環境科学に関する入門的なガイダンスが学生によってなされました。一方、残念なことに、2006年6月に赴任された雪氷学や気象学が専門の西村浩一先生が9月から名古屋大学に転出されることになりました。

7月から理学部C棟西側の改修工事が始まり、完成する来年4月には、当学科の生物系グループが大学院管理棟から理学部へと移り、最終的な学科の居場所が定まる予定です。



● 附属臨海実験所ニュース ●

附属臨海実験所では、毎春、全学部を学生を対象とした公開臨海実習を開催しています。本年は、東京大学大学院・三崎臨海実験所の赤坂甲治先生を協力教員としてお招きし、3月3日から4泊5日の日程で実習を開催しました。理学部からは18名（生物学科3名、自然環境科学科14名、地質科学科1名）、農学部から3名、人文学部から1名、総勢22名の学生が参加しました。赤坂先生の棘皮動物に関する講義を熱心に受講する一方で、海産無脊椎動物の観察、パフウニの発生実験や海藻標本の作製など、様々な実習項目に積極的に取り組み、海洋生物の多様性に理解を深めていました。また、各人が取り組んだ課題を発表する研究発表会も行われ、受講者どうして活発な議論を交わしていました。まだ少し肌寒い天候でしたが、様々な学部所属の学生が寝食を共にし、充実した時間を過ごし、思い出に残る5日間であったと思

われます。なお、来年3月上旬にも全学部対象の公開臨海実習を開催しますので（2009年1月中旬に各学部の学務係を通じて案内を掲示予定）、理学部学生の皆さんも学内の友人を誘って、本実習に参加してください。



赤坂先生の講義を熱心に受講する学生たち（左）と、海藻標本の作製に取り組む学生たち（右）

● 退任教員の紹介 ●

転任のご挨拶

自然環境科学科 教授 西村 浩一

本年9月より名古屋大学環境学研究科地球環境科学専攻へ転任する運びとなりました。2年3ヶ月という非常に短い期間ではありましたが、皆様には大変お世話になりました。深くお礼申し上げます。また、このたびの私のわがままを快くお許しくださいました自然環境科学科の先生方には衷心よりお詫びと感謝を申し上げます。

本学に赴任当初は、それまで大学院や研究所での生活が長かったこともあり、如何に長丁場の講義をこなすかが大きな課題でした。大学の新任教員研修および学習教育ワークショップを受講し、その後は「大学生だからこの程度は当然知っているはず、もう少し高度な内容を加えて…。え、むずかしすぎる？」等々の試行錯誤を繰り返して参りましたが、果たしてどこまで「目的達成型の教育」を成し得たことか。大いに疑問なところであります。

雪氷学に携わる研究者が、ほとんど雪の降らない名古屋へ行っ
て一体どうするのと訝られる向きもございすが大丈夫。今後はこれまでの雪崩や吹雪に加えヒマラヤやチベットの氷河も研究対象に含める予定であります。また、新潟は雪が降る時の気温が0℃付近に著しく集中しているため、わずかな気候の変化で現在の自然環境が劇的に変動しうる特殊な地域です。魅力的な研究対象を求め、これからも足繁く御邪魔させていただくことになると思います。その際には、また是非、新潟の美酒の宴にお付き合いいただけますようお願い申し上げます。



● 事務職員紹介 ●

本年4月に理学部事務スタッフの人事異動がありました。総務係長には太田耕治総務係主任が昇任し、主に予算管理、資産管理、職員任免などを担当し、併せて総務係を総括します。小嶋貴幸総務係員は医学部保健学科からの配置換えで、主に旅行命令及び旅費計算、授業料債権管理、謝金手続きなどの業務を担当します。小池歩総務係員は医歯学総合病院からの配置換えで、主に各種助成金関係、研究協力関係、物品検収の業務を担当します。中村紘朗総務係員は、昨年8月採用され、主に職員兼業関係、給与関係、共済関係の業務を担当します。櫻井琢也学務係主任は、大学院実務法學研究科からの配置換えで、主に入学試験関係、教員免許関係、学生異動関係の業務を担当します。西澤順子学務係員は、本学部物理学科事務室を退職後再雇用され、主に講義室管理関係、学生健康診断関係、各種証明書関係の業務を担当します。

各員は、新潟大学等での実務経験のほか、民間企業での職務経験を活かし、学生の皆様や来訪される皆様に対して親切丁寧な応

対に努めます。また、時には積極的な提案や適切な判断を行い、理学部の教育研究活動を側面からサポートできるよう日々精進します。教員、学生、共同研究者の皆様がより良い教育研究活動を行えるよう、また充実したキャンパスライフを送れるよう環境整備、設備拡充、サービス向上にも力を注いで参りたいと考えておりますので、ご指導ご協力の程よろしくお願い致します。



写真左から、太田耕治、小嶋貴幸、小池歩、中村紘朗、櫻井琢也、西澤順子

オープンキャンパス 春、夏の報告

今年もオープンキャンパスが春と夏の2回行われました。

春のオープンキャンパスは3月16日(日)に実施され、高校生、引率教諭、保護者合わせて115名の参加がありました。当日は全体説明会(13:00～13:35)として、学部長あいさつの後、渡辺勇一教授の全体講演会「理学を学ぶ道」があり、「理学」の特徴や社会における意義についての紹介や将来理学を学びたい人が今から目を向けておきたい事柄について話がありました。その後各学科に分かれて学科別説明会(13:40～16:00)が実施されました。

新潟大学の夏のオープンキャンパスは、昨年までと異なり、5日(火)と8日(金)に分かれて実施することになり、理学部では8月8日(金)の12:30～16:00に行われました。参加者の予想が困難でしたが、昨年度並として2コースに分けて企画しました。全体説明会(総合教育研究棟E260講義室)と理学部棟での各学科説明会が90分ずつ平行して行われ、前半と後半で入れ替えて参加する形式となりました。参加者総数は約510名となり、昨年より落ち着いた雰囲気で行われました。

全体説明会では、大学で学ぶことや新潟大学での学生生活を紹介した後、続いて50分ほどの模擬講義がそれぞれのコースでありました。自然環境科学科の西村浩一教授による「雪と氷の世界」では積雪の形が時間とともに変化する模型を見たり南極で採取した数万年前の氷が溶けて空気が開放される際に発する音を聞くことができたり貴重な体験でした。化学科の工藤久昭教授の「元素を造るー新元素の発見を目指してー」では、新規重元素を造る困難さとそれを克服していく粘り強い研究者の活動が披露されました。

各学科説明会では、模擬授業、教育施設や研究室見学、パネルやポスター展示による研究や学生生活の紹介、教員や学生との対話や質問コーナーなどが特徴的な企画でした。また、進路指導の先生方と理学部教員との懇談会が実施され、高校側からの意見や要望、理学部からの説明など、情報交換や討論が行われました。

(広報委員会委員長 徳江郁雄)



2008 年度 新潟大学理学部 学部・学科体験の報告

理学部の学部・学科体験は8月4日(月)10:00～15:30まで、理学部校舎で開催され、148名の高校1年生が参加しました。例年と同様、午前中に全体説明会があり、午後は参加者が各学科の行事を自由に訪問する形で行われました。

午前中は、新潟大学全般(施設・教育・課外活動)の紹介や理学を学ぶ意義、理学部各学科の概要や学生生活の説明があり、続いて数学科の吉原久夫教授による模擬講義「数学の実用性と美と永遠性」がありました。内容は、フィボナッチ数列、黄金比や素数を例に採り上げ、数学が身近なところで実際に役立っていることの紹介や、いくつかの数式の美しさや数学理論の永遠性についてのお話でした。

午後は、各学科企画の自由見学でした。パネルやポスター展示による教育や研究の紹介などの他、各学科の特徴的な企画は以下のようなものです。

数 学 科：数学の研究者との対話

物 理 学 科：「暗黒宇宙を輝らす光～20世紀の物理学革命と21世紀の展望～」 「放射線を見てみよう」

化 学 科：「目で見てわかるおもしろ実験」

生 物 学 科：実験動物や植物の展示、デモ実験「車軸藻のおじき」、「乾燥に耐える甲殻類アルテミアの「乾眠」」他

地 質 科 学 科：地球の不思議に触れてみよう(サイエンスミュージアムにおいて)、「地震の化石ってなんだ!？」他

自然環境科学科：対話形式による教員や学生との懇談会、自主ゼミ成果発表会「台風って何?」、「信濃川124時間水質一斉調査」

(広報委員会委員長 徳江郁雄)



2008 年度新潟大学理学部コロキウム

2002年度から始まった理学部コロキウムは本年7月で33回を数え、恒例の行事となりました。理学部コロキウムは、理学部での研究を多くの人たちに広く知って貰うために、理学部系教員から専門以外の人々に対して、研究内容を分かりやすく説明して頂き、討論する会です。他学科の教員のほか、一般学生など広い範囲の人々の参加で行われています。

今年度前半のコロキウムは、以下のように、地質、数学、物理の分野でした。

- ・第31回(2008年5月30日)◇地質科学科 栗田 裕司 准教授 「うすうす渦鞭毛藻の化石と地層記録の解読～教育と研究～」
- ・第32回(2008年6月25日)◇数 学 科 高田 敏恵 准教授 「結び目の数学 ～同じ結び目?～」
- ・第33回(2008年7月30日)◇物 理 学 科 松尾 正之 教 授 「中性子過剰原子核 ～宇宙の進化と元素の起源を読み解く鍵～」

今年度後半は、

- ・第34回(2008年10月22日)◇化 学 科
- ・第35回(2008年11月26日)◇生 物 学 科
- ・第36回(2008年12月24日)◇自然環境科学科

を予定しています。詳細は理学部ホームページでお知らせしますので、ぜひご参加ください。

<http://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/res/next-colloq.html>

(研究WG委員会委員長 竹内照雄)

頭足類展 アンモナイトとその仲間たち

頭足類展では、国内外で採取されたアンモナイトをはじめとする頭足類を展示し、新潟大学における研究の実例を通して、それらが地質学にどのように役立っているのかを紹介します。あさひまち展示館では、企画展の解説冊子を無料で配布しています。

- ・展示期間：2008年7月17日(木)～2008年10月28日(火)の火・木・土の10:00～18:00
- ・場 所：新潟大学旭町学術資料展示館(あさひまち展示館)
- ・入 館 料：無 料
- ・スタンプラリーについて：サイエンスミュージアム(五十嵐キャンパス)とあさひまち展示館(旭町キャンパス)のスタンプを2つ集めると、「本物の化石」または「アンモナイトの絵はがきセット」のいずれか1点をさしあげます。「本物の化石」のお渡しは、サイエンスミュージアムでのみ行っています。記念品の引き換えは、企画展の終了日(2008年10月28日)までです。

(地質科学科長 松岡篤)

平成19年度卒業生進路状況および平成20年度入学者数

入学者数		卒業生進路(平成20年3月卒業)						
新入学	3年次編入学	学 科	進 学	企 業	教 員	公務員	その他	計
38	2	数 学 科	13	11	4	2	3	33
48 *	3	物 理 学 科	36	11			1	48
37		化 学 科	15	12	1	2	1	31
21	3	生 物 学 科	15	8				23
25		地 質 科学科	14	7		2	1	24
31	2	自然環境科学科	17	10	2	1	2	32
200	10	計	110	59	7	7	8	191

* 留学生を含む

これからの
行事予定
(平成20年度後半)

10月1日 : 第2学期授業開始
10月20日～26日 : 新潟大学WEEK
10月25日～26日 : 大学祭
11月29日～30日 : 推薦入試
12月24日～1月6日 : 冬期休業

1月17日～18日 : 大学入試センター試験
2月25日～26日 : 前期日程入学試験
3月11日～ : 春期休業
3月12日 : 後期日程入学試験
3月23日 : 卒業式・卒業祝賀会

新 潟 大 学 W E E K

理学部企画

10 / 10 (金) ～ 26 (日) サイエンスミュージアム 特別開放

10 / 25 (土) みてさわって! 身近な物理と物理学最前線

10 / 25 (土) ～ 26 (日) 地質まつり 10 / 26 (日) 地質技術者と在学生の集い